兵庫教育大学広報誌
http://www.hyogo-u.ac.jp

教育子午線
Kyoiku-Shigosen

February 2007
兵庫教育大学
vol.13

- キャンパス通信
- うれしの交差点

● 教育最前線

教育現場の課題解決をめざし 小学校教員養成の在り方を考える

● 日々是研究

堀江祐爾

● 特報

連合学校教育学研究科が創立10周年

巻頭言

「言葉の力」とは何か

「言葉の力」をこれからの教育の中心に置こう、という動きが強まっています。このこと自体は歓迎すべきことですが、肝心の「言葉の力」を非常に矮小化して語る向きが見られます。「言葉の力」をコミュニケーションの道具という面からのみ考え、「聞く・話す」ための力のことばかりを語り合う、という矮小化です。言葉については、少なくとも6つの主要な機能を考えておかねばならないでしょう。

まずは【認識の道具】としての言葉です。感覚されたものは言葉によってカテゴリー化され、概念化され、初めて認識が成立します。内外の世界そのものが「現地」であるとすれば、それが言葉化され、認識となった「地図」にも注目すべきです。

【記録の道具】としては、情報の蓄積を個々の頭の中でする（記憶）だけでは不十分なので、どうしても外部に情報を蓄積（外部記憶）していくことになります。そうすることで、人の活用する情報量は飛躍的に増大します。

【思考の道具】としては、言葉を用いて初めて思考が可能になる、という点が重要でしょう。課題追究、問題解決といった活動も思考抜きには考えられません。また、その根底となる概念や論理の学習も課題となります。文章や発言の筋道をきちんと読み取ること、筋道を通した表現ができることが収束的思考のためには不可欠です。同時に、一つの言葉なり概念なりから多くのことを思い浮かべるといった拡散的思考にも注目すべきです。

【伝達の道具】としての言葉については、国語教育の世界で現在においても数多くの論考や実践が提出され続けています。したがって、ここではこれ以上触れることはしません。

言葉は【呪縛・解放・鼓舞の道具】でもあります。日本の伝統的な言霊信仰も、この面から見直すべきでしょう。また、俳句や短歌や詩といった韻文はもとより、言語芸術の全体が単なる伝達を超え、精神そのものへの強い働きかけの面を持っています。さらにはテレビや新聞、雑誌のコマーシャル、政治家や新興宗教の指導者らの大衆向けアピールが、どのような扇情的意味を持つか、冷静かつ客観的な形で認識していくことが必要です。

言葉はこれらの全てを含む【文化の創造と継承の道具】です。言葉は文化なのです。古典の学習から始めて、文化としての言葉の学習を今後はもっと重視すべきでしょう。

学長 梶田叡一（かじたえいいち）

Campus Topics

兵庫教育大学の動き

2006 10月→2007 1月

10月

1日
◎創立記念日
◎加西市との連携協力に関する協定書調印

4日
◎加東市との連携協力に関する協定書調印

附属幼稚園運動会

7日
◎附属幼稚園運動会

10日
◎京都市教育委員会との連携協力に関する協定書調印

15日~29日
◎公開講座「歌の伴奏をしてみよう(後期)」(全3回)

11月

5日
◎附属中学校「友嬉祭」

9日
◎附属幼稚園研究発表会

11日
◎平成19年度大学院入学者選抜試験(後期)

15日~17日
◎附属小学校6年生修学旅行

16日
◎加東市国際交流サロン

17日
◎附属中学校研究発表会

18日~19日
◎大学祭「嬉望祭」

18日~26日
◎公開講座「絵画制作」(全4回)

大学祭「嬉望祭」

公開講座「絵画制作」

教員養成GP成果報告会

12月

1日
◎平成19年度大学院入学者選抜試験合格者発表(後期)

3日
◎教員養成GP成果報告会

20日
◎附属幼稚園第2学期終業式

22日
◎附属小学校、中学校第2学期終業式

1月

9日
◎附属小学校、中学校第3学期始業式

10日
◎附属幼稚園第3学期始業式

20日~21日
◎平成19年度大学入試センター試験

30日
◎学部推薦入学者選抜試験

はじめまして

山口忠承(やまぐち ただつぐ)
(自然・生活教育学系助教授)

平成18年10月1日付で自然・生活教育学系に着任しました。専門は有機光化学です。私たちの生活に医薬品やプラスチックなどの物質は欠かせません。身の回りにある物質の本質を理解するには、物質の構造(組成)や物理的性質を注意深く観察することが必要です。身近な物質に興味を持ち、物質や物質に基づく現象を科学的に説明できる人材を育成したいと思います。

教育子午線
Kyoiku-Shigosen
February, 2007

Contents

04 教育最前線
教育現場の課題解決をめざし
小学校教員養成の在り方を考える

08 日々是研究
PISA調査が示唆するもの
—本物の「読解力」を求めて—
堀江祐爾(社会・言語教育学系教授)

09 教育現場からの質問
教員の著書紹介

10 特報
連合学校教育学研究科が創立10周年

12 キャンパス通信

14 卒業生からの手紙

15 うれしの交差点

16 兵庫教育大学からのお知らせ

教育最前線

教育現場の課題解決をめざし 小学校教員養成の在り方を考える

小学校教育をめぐる諸課題は年々、複雑化、多様化しており、その解決に向けて、高度な専門性と実践力を備えた教員が求められています。そこで兵庫教育大学では平成19年度から大学院修士課程に「小学校教員養成特別コース」を新設。これからの時代にふさわしい教員の養成に取り組んでいきます。

◎TEXT

千駄忠至
（体育・芸術教育学系教授）

吉川芳則
（社会・言語教育学系教授）

教育改革に対応できる高い力量が求められる

生活体験の不足、国際学力テストなどに見られる学力低下、不登校、いじめ…。現在、子どもや小学校教育をめぐるさまざまな課題が議論されており、それらを受けるかたちで、学校現場には次から次へと教育改革の波が押し寄せています。

教員はそうした動向に柔軟かつ適切に対応していかなければならず、これまで以上に高い力量が要求されるようになりました。多くの教員は、分かる授業、楽しい授業をしよう、子どもたちと真正面から向き合おうと、日々の実践に熱心に取り組んでいます。また、自己研さんに励み、創造的な教育活動を展開しようと努めています。しかし一方で、熱意や指導力の不足、人格的資質の欠如などが認められる教員がいることも事実であり、マスコミにもしばしば取り上げられています。

中教審の答申で示された教員に必要な3つの条件

現在の教育現場ではどのような教員が求められているのでしょうか。平成17年10月の中央教育審議会の答申『新しい時代の義務教育を創造する』には「教師に対する揺るぎない信頼を確立する」の項目があり、優れた教員の条件として次の3つの要素が示されました。

①**教職に対する強い情熱**…教師の仕事に対する使命感や誇り、

子どもに対する愛情、責任感など。また、常に学び続ける向上心も。

②**教育の専門家としての確かな力量**…子ども理解力、児童・生徒指導力、集団指導の力、学級づくりの力、学習指導・授業づくりの力、教材解釈の力など。

③**総合的な人間力**…子どもたちの人格形成にかかわる者としての豊かな人間性や社会性、常識と教養、礼儀作法をはじめとする対人関係能力、コミュニケーション能力などの人格的資質。

①②③はいずれも教員として必須の要素、能力です。とりわけ②の力量こそ「教育のプロ」たるゆえんとしていること、また家庭や地域と連携した教育の一層の推進が要請されている現状から、③の「総合的な人間力」が取り立てて強調されていることなどは注目に値します。

課題を見出し省察する修士課程の新しいコース

3つの条件を備えた小学校教員の養成を視野に入れ、兵庫教育大学では19年度から大学院修士課程に教育実践高度化専攻を新設し、「小学校教員養成特別コース」がスタートします。このコースでは「実践的な指導力」と「自己の実践を省察・改善できる能力」を身に付けることをめざします。

小学校教育は、深い子ども理解に支えられた「学級づくり」と「授業づくり」が大きな柱であり、児童一人一人に合った課題への対応、地域や保護者との連携なども重視しなければなりません。それらを踏まえ、小学校教員養成特別コースでは「学級経営」「教科等の指導」「個の課題」「教育実践研究」「教科の授業内容・方法」「学校での実習」の6分野をカリキュラムに設定。体験的かつ実践的な学びのスタイルを積極的に推進するため、実地研究Ⅰ（4週間）、同Ⅱ（8週間）、インターンシップ（年間60時間）を用意します。実践の中に課題を見出し、それを省察することを重視します。

実践に即応した授業の充実を図ることは今後、学部と大学院のそれぞれでますます重要になってくるでしょう。

〈小学校教員養成特別コースの授業科目〉

分野	科目名
学級経営に関する分野	▶学級づくりと教育的関係の構築 ▶特別活動指導と自治的文化的活動の展開
教科等の指導に関する分野	▶教科の授業づくりと授業分析・評価 ▶道徳教育諸理論と道徳の授業づくり ▶総合学習の創造過程と評価法
個の課題に応じた分野	▶生徒指導とキャリア教育の実際 ▶障害のある児童への指導と支援方法
教育実践研究に関する分野	▶教育実地基礎研究Ⅰ（レポート作成法の研究） ▶教育実地基礎研究Ⅱ（教育実践研究法の研究） ▶教育実践研究（アクション・リサーチ）
教科の授業内容・方法に関する分野	▶教科の内容・指導法研究Ⅰ（国語科・音楽科） ▶教科の内容・指導法研究Ⅱ（算数科・図工科） ▶教科の内容・指導法研究Ⅲ（社会科・家庭科） ▶教科の内容・指導法研究Ⅳ（理科・体育科） ▶教科の内容・指導法研究Ⅴ（生活科・総合学習・英語）
学校での実習に関する分野	▶実地研究Ⅰ（基本実習） ▶実地研究Ⅱ（発展実習） ▶実地研究リフレクションセミナー ▶インターンシップ

教育最前線

個々の体験につながりを見出すことが大事

基礎教育学系助教授
別惣淳二（べっそうじゅんじ）

教育実践高度化専攻の「小学校教員養成特別コース」では「リフレクション（reflection）」を重視した実習科目の充実を図ります。リフレクションには「過去の行為・決定について注意深く考え直す」という意味があり、学生が教育実習（学校現場）で体験したさまざまな出来事を振り返り、省察することで、自身の教員としての資質を高めていく狙いがあります。

兵庫教育大学の学校教育学部では創設以来、教育実習を重視してきました。現在は、1年次から段階的に教育現場での実践的経験が得られるように実地教育を体系化し、学生は4年間で14単位の実地教育科目を履修します。具体的には、附属学校での教育実習（4週間）のほか、1年次に幼・小・養護学校での観察実習、2年次にキャンプなどを通して子どもと活動や生活を共にする観察参加実習、3年次に1年間を通して附属学校の学級経営や学校行事などに参加する実習、4年次に母校等での教育実習などを開設しています。このように学部の実地教育では、多様な実習の機会を通して、初等教員として必要な資質と実践的指導力を実地に即して修得させることをめざしてきました。

近年は、全国の教員養成系大学・学部でも学生の実践的指導力の修得に向けた実習改革が進められています。その改革では1年次から学校現場の実態に触れたり、子どもとかかわったりする体験的科目を設置したり、教育実習が終わってからも学校現場で教育的体験の機会が得られるように学校ボランティアやインターンシップを科目として設けるなど、現場での体験の機会を増やす傾向にあります。

実践的指導力をはぐくむ実地教育。

しかし、現場体験の機会を増やせばおのずと実践的指導力が身に付くわけではありません。学生がいくら現場体験を積み重ねても、個々の体験同士につながりを見出さなければ、一過性のイベント的なものに過ぎません。また、学生が無自覚のまま現場体験に臨めば、学校現場に適応することが目的となってしまい、現場体験から絶えず新しいものを生み出そうとする教員本来の創造的な能力が形成されにくくなることも考えられます。

これからは学生に何を実習、体験させるかという内容も大切ですが、いかに学生が現場での実践体験を基に自己の解決すべき課題を設定し、課題解決に向けて理論的、研究的知見から総合的に分析できるか。そして、その分析を通して改善方策を打ち出せるかという学生の「体験から学ぶ」能力の開発が課題です。

その意味からも、実習や体験的科目を受けた後のリフレクションが重要です。リフレクションは学生が個々の実践体験を理論的に意味付け、自らの教育観を捉え直すとともに、その体験を実際の教育実践に結び付いた〝知〟へと構成し直すことが主な狙いです。そのリフレクションで問題になるのは省察の質と深まりです。単に実践体験を学生に振り返らせるのではなく、学生が次の実践に向けて明確な改善方策や実践課題を設定できるように導いていく必要があります。そうした質の高いリフレクションを学生に促すことが、これからの実習指導で重要になると考えています。

これからの小学校教員養成で重視されるのは「リフレクション」

体験を〝知〟に高める体系的指導をめざす

社会・言語教育学系教授
関（せき） 浩和（ひろかず）

平成19年度から小学校教員養成特別コースで開講する「実地研究リフレクションセミナー」はリフレクションを明確に位置付けた授業科目です。18年度の教員養成GP成果報告会※でも公開研究授業として取り組み、教職大学院におけるモデル授業として提示しました。

実地研究リフレクションセミナーは、4週間の基本実習と8週間の発展実習の期間中、それぞれ週1日は大学に戻り、実地研究の経験を実習日誌に基づいて省察し、自己の実践を理論的に意味付けます。そうすることで、教育実習の成果と自己課題を明確にします。これは体験を〝知〟に高めるリフレクションの体系的指導であり、教育現場での学習を単なる体験にとどめず、それを省察することで経験として蓄積し、学生自身が教員として必要な資質を見出すことをめざします。

授業は少人数グループをベースとして、省察の方法にはナラティブ（narrative：物語）アプローチを採用します。一つの出来事を他の出来事と結び付けて、物語として語ると、その出来事を意味付けることができます。自分が取り組んだ教育実践を学級づくりや子ども理解、授業づくり、教員としての心構えなどの視点から再構成し、グループのメンバーや大学教員との討論を通して、自分自身の成長につなげるようにします。また、実践に対する理解の不十分さに気付いたり、視点を変えながら過去の出来事に対する意味付けを再構成したりすることで、実践をより深く熟考する省察力と学生自身の教師像や指導観が形成されると期待しています。

また、自己の専門性を生かしたかたちでの実践的指導力や展開力の育成だけでなく、絶えず実践を省察することで、小学校教員としてのより高い資質を育成していくことにつながると考えています。

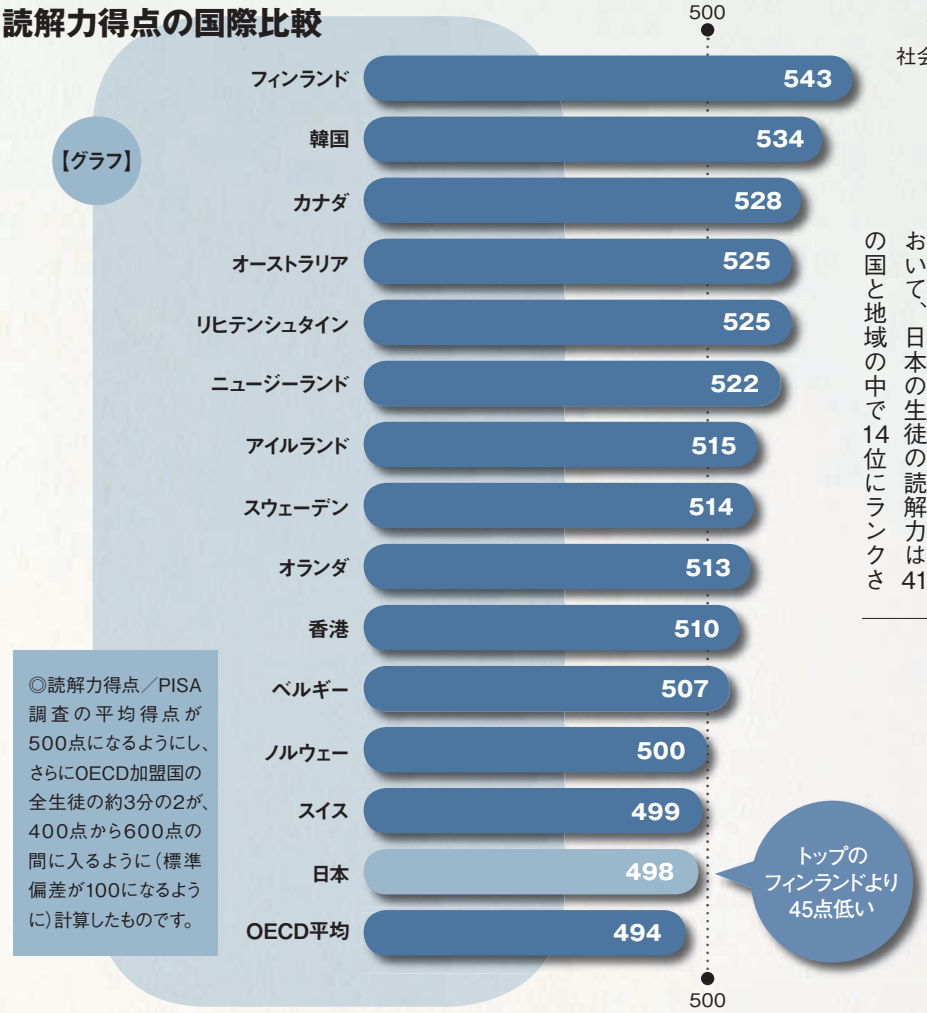
※教員養成GP成果報告会…文部科学省の「大学・大学院における教員養成推進プログラム（教員養成GP）」に採択された兵庫教育大学のプロジェクト『大学と教育現場の協働的教師教育プログラム』の一環として昨年12月に開催。カリキュラム紹介や公開研究授業などを通して教職大学院の運営体制のモデルを提示しました。

教員養成GP成果報告会で行った公開研究授業。

堀江祐爾（ほりえ ゆうじ）
社会・言語教育学系教授

PISA調査が示唆するもの
―本物の「読解力」を求めて―

OECD（経済協力開発機構）が2003年に実施した「生徒の学習到達度調査（PISA調査）」において、日本の生徒の読解力は41の国と地域の中で14位にランクされました。前回、2000年（8位）からの得点の下がり幅は、日本が最も大きかったため、いわゆる「読解力低下批判」が起こりました。



ここで気をつけたいのは、PISA調査には日本の生徒が解き慣れていない問題も含まれているということです。例えば「贈り物」という文学的な文章を使った問題に次のようなものがありました。【最後の文が、このような文で終わるのは適切だと思いますか。最後の文が物語の内容とどのように関連しているのかを示して、あなたの答えを説明してください】

日本の国語科教育では、このような問いかけはあまりなされません。読解に関する得点が低下したのは事実ですが、もう少し時間をかけて、きちんと調査すべきではないかと思います。

とは言え、PISA調査において重視された「読み取ったことを基に根拠や理由を明確に示しながら自分の意見を述べる」ことは、次回の学習指導要領でも強調されるに違いありません。

もちろん、教科書も変わっていくでしょう。例えば「森林のおくりもの」（東京書籍5年下）という教材の手引きには【筆者はなぜ「森林のおくりもの」という題を付けたのだろうか】という問いかけがあります。これをPISA調査風に書き直すと、【筆者が使った「森林のおくりもの」という題の効果を3つ以上考えよう。また、あなたなら他にどのような題を付けるか考えてみよう。そして、その題を付ける理由について述べなさい】となります。従来の日本流の読解指導に加え、グローバル・スタンダード的な指導も行われるようになっていくということです。

PISA調査とは

The Programme for International Student Assessment（生徒の学習到達度調査）の略。OECD（経済協力開発機構）が2000年から3年ごとに実施しています。対象は義務教育修了段階の15歳の生徒。数学的リテラシー、読解リテラシー、科学的リテラシー、問題解決能力の4領域の知識と技能について調査します。2003年は数学的リテラシーが中心分野で、41の国と地域から約27万6,000人が受けました。

教育現場からの質問 Q&A

アドバイザー
佐藤哲也（さとうてつや）
基礎教育学系助教授

Q 「幼保一元化」の一環として、昨年10月に「認定子ども園」がスタートしました。幼稚園と保育所を一つにすることに至った経緯とその目的は何でしょうか。また、認定子ども園にはいくつかの問題点も指摘されているようですが。

A 1990年代以降、深刻な財政危機を打開するため構造改革が推進されていますが、幼児保育の分野でも、幼稚園（文部科学省管轄の学校）と保育所（厚生労働省管轄の児童福祉施設）という二つの制度を一つにまとめる「幼保一元化」の試みが本格化しました。

幼保一元化の主な目的は、保育所の待機児童数削減と幼稚園の定員割れ対策、幼児教育の一貫性の確保、子育て支援体制の強化などが挙げられます。

導入に当たっては、全国36カ所のモデル施設で調査研究が行われました。最終的には昨年6月に「就学前の子どもに関する教育、保育等の総合的な提供の推進に関する法律」が公布され、10月から都道府県が認定する「認定子ども園」が創設されることになりました。

スタートしたばかりの「認定子ども園」ですが、有識者などからは主に次のような懸念の声が寄せられています。

◎幼稚園や保育所よりも認可基準が低い

◎市場原理を導入（園と保護者との直接契約方式採用、設置主体の要件が未規定）により営利企業の参入を可能にした

◎スタッフの研修体制が未確立

◎財政の削減や効率化が発想の根底にある

幼保一元化をめぐっては「子どもの最善の利益」を最優先にして、教育・保育の視点に立った議論を重ねることが求められています。

Books

教員の著書紹介

『特別支援教育における教育実践の方法』

（ナカニシヤ出版・平成18年刊）

著者：宇野宏幸（臨床・健康教育学系助教授）ほか

現在、障害児教育から特別支援教育への転換が図られている。この中で、小中学校の通常学級に在籍することが多い学習障害児や注意欠陥多動性障害児、高機能自閉症児などに積極的に対応していくことが求められている。これに当たって、学校は保護者や学校外の機関（医療、福祉など）と連携を密にすることが打ち出されている。

本書は、発達障害についての最新の研究成果と指導法、対応法を結び付けて提示し、連携システムの構築までを包括的に扱っている。学校現場の先生方に読んでいただく一冊としてお薦めしたい。

『教育実践学の構築 ―モデル論文の分析と理念型の提示を通して―』

（東京書籍・平成18年刊）

著者：兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科

本書は昨年9月23日、連合学校教育学研究科の創立10周年記念式典に合わせて出版したもので、第1章「教育実践学構築の理念と歴史」、第2章「教育実践学の展開モデル」、第3章「教育実践学構築への展望」で構成している。平成16年9月の編集ワーキングの会合を皮切りに、研究科長や研究主幹、副研究科長、各連合講座の議長などが原稿読み合わせ会を重ねた。各構成大学長・学部長にも執筆を願うなど総勢33人が携わり、2年がかりで完成した。教育実践にかかわる論文を作成する学生や構成大学教員をはじめとする多くの人たちに読んでいただきたい。

（文責：連合大学院事務室）

※教員の著書は附属図書館で閲覧できます。詳しくは学術情報課 TEL 0795・44・2062へお問い合わせください。

連合学校教育学研究科が創立10周年

特報

昨年9月23日、大学院連合学校教育学研究科（以下連合研究科）の創立10周年記念式典をグランキューブ大阪（大阪市北区）で開催しました。4カ国の教育学研究者を招いた国際シンポジウムも開かれ、約200人の参加者は今後の学校教育の課題や展望についての提言に熱心に聴き入りました。

連合研究科は平成8年、兵庫教育大学、上越教育大学、岡山大学教育学部、鳴門教育大学が連携・協力し、教員養成系大学では全国初の博士課程（後期3年のみ）として設置されました。従来の教育学とは異なり、学校現場の実践に根ざした「教育実践学」の確立と推進、またその役割を担う人材の育成を通して、学校教育の改善に貢献することを目的としています。

連合研究科は、学校教育の方法・臨床を研究する学校教育実践学専攻、教科教育の方法・内容を研究する教科教育実践学専攻の2専攻の下、7つの連合講座（学校教育方法、学校教育臨床、言語系教育、社会系教育、自然系教育、芸術系教育、生活・健康系教育）を設置しています。学生はいずれかの講座に所属し、4大学300人余りの指導教員が多岐にわたる研究分野をカバーしています。昨年9月までに延べ113人の課程博士、46人の論文博士を輩出し、修了生はそれぞれの分野で中核的・指導的な立場で活躍しています。

今後も、教育現場の諸課題やニーズを常に見すえ、改善・改革を促すための教育研究活動の深化や人材の育成を図りながら、さらなる改革・発展をめざします。

記念式典において、4カ国の研究者を招いて開催した国際シンポジウム。

◎プロジェクトC（15年度～17年度）
青少年の危険行動と学校教育
―総合的発達支援及び養護性の育成―

青少年の危険行動防止をめざすとともに、子どもたちの総合的発達を支援し、養護性を育てるプログラムの開発をめざしたものです。①幼児期から学齢期までの子どもの危険行動・問題行動の実態把握 ②危険行動・問題行動予防プログラム作成 ③学校教育を通じた総合的発達支援および養護性の育成について共同研究を進めました。③については、附属小学校で子どもたちの社会性と養護性の育成

【共同研究プロジェクト】

連合研究科では平成15年度にチーム単位でプロジェクト型の研究を推進するため、研究費予算（3年継続）を創設しました。チームは4大学の教員に学生や学外の研究員を加えたもので、所属や専門領域の垣根を越えて研究に取り組んでいます。毎年、プロジェクトを公募し、現在までに8つ（A～H）を採択しました。

◎プロジェクトE（17年度～）
教育実践学の理論構築及びモデル研究

連合研究科の創立から10年間の教育実践学研究の実績と評価を総括するとともに、世界的な教育諸科学の動向を見すえた実践学の構築に向けた今後の方向性を示すことを目的とします。研究内容は①教育実践学に関連する基礎的な教育理論の動向把握 ②教育実践学の研究モデルの追及 ③教育実践学的展開を行う組織・機関の特定と実地調査 ④研究成果の教育的活用と『教育実践学の構築第3集（仮称）』の刊行。③については、昨年度にアメリ

連合学校教育学研究科長
岩田一彦（いわた かずひこ）

10年間の成果と飛躍に向けての課題

連合学校教育学研究科が創設されてからの10年間、「教育実践学の構築」をめざしながら、個別の博士論文指導にも力を入れてきました。モデルなき状況の中、連合研究科では書籍や論文集の刊行、フォーラムの開催などを通して、研究成果を広く社会に還元すると同時に、高度かつ専門的な教育実践学の研究者を育ててきました。

SatelliteCampus

連合大学院大阪サテライト

平成16年に完成したキャンパス・イノベーションセンター（大阪地区）内に設置。博士課程の研究指導、研究科の諸会議、教育実践学フォーラムなどの拠点として、幅広く活用しています。

大阪市北区中之島4-3-53キャンパス・イノベーションセンター（大阪地区）401号室、402号室

TEL 06・6444・5228

FAX 06・6444・5243

History

平成 8年	4月 1日	連合研究科設置
	4月 13日	平成8年度入学試験
	4月 26日	第1回入学式
	6月	開設記念式典
	7月	第1回総合共通科目を実施
11年	3月	第1回学位記授与式 『教育実践学の構築』刊行
12年	3月	『教育実践学論集』創刊
	9月	論文博士第1号の学位記を授与
15年	3月	RCSを導入
	4月	共同研究プロジェクトを創設
16年	4月	大阪サテライトを設置 D1セミナーを開始 教育実践学フォーラムを創設
	12月	学生研究発表会を創設
17年	4月	基幹研究プロジェクトを開始
18年	9月	創立10周年記念式典 『教育実践学の構築 －モデル論文の分析と理念型の提示を通して－』刊行

Students' Data

◎学生数100人

	1年	2年	3年	合計
学校教育実践学専攻	13	13	15	41
教科教育実践学専攻	16	17	26	59
合計	29	30	41	100

◎研究生数…14人

◎総教員数…319人（兵庫教育大90人、上越教育大83人、岡山大63人、鳴門教育大83人）

◎延べ博士学位授与数

▶課程修了者…113人（現職教員44人、留学生15人）

▶論文提出者…46人

※いずれも18年10月1日現在

【学生支援策】

連合大学院という地理的な特性、社会人学生が多いことなどを配慮し、さまざまな学生支援策を実施しています。

◎フレックスタイム・カリキュラム制度の導入

社会人学生の便宜を図り、休業期間や夜間でも開講します（一部の授業科目を除く）。

◎国際学会等出席の旅費支援

学生が国際学会等で研究を発表したり、海外での共同研究に参加する際、それにかかる旅費を支援します（年8人程度を公募）。

◎学生研究発表会の開催

年1回、1泊2日で開催。全7講座の学生が研究を発表し、他分野との相互交流を深めます。修了生による講演会、指導教員を対象とした研究指導検討会も合わせて開催します。

◎RCS（リアルタイム・コラボレーション・システム）の活用

インターネットを使った遠隔教育システム。遠方の学生の指導や研究科の諸会議に活用しています。

共同研究プロジェクト例

をめざす特設教科「人間発達科」を設置。学年ごとに学習目標を設定し、自分自身や他学年児童の発達の観察学習、乳児との交流観察学習、感情・思考の発達に関する学習を実施しました。その結果、児童は学習を楽しみ、成長・発達への理解が増し、共感性や社会性、養護性が育つことが示されました。

共同研究プロジェクト例

カ、ドイツ、イギリス、中国で実地調査を行い、海外の研究者を本学に招いてシンポジウムを開催しました。今年度は、プロジェクトの一環として、創立10周年記念式典において国際シンポジウムを開催。国際的視野に立った教育実践学の理論構築に向けて、現在も共同研究活動を推進しています。

そして、これまでの研究活動の集大成として、その成果をモデルとして結実させたのが、昨年9月に刊行した『教育実践学の構築－モデル論文の分析と理念型の提示を通して－』です。本書で教育実践学の体系化への方向性を示しました。

創立からの10年は基盤づくりでしたので、これからは飛躍の10年にしなければなりません。そのために、「研究科の全領域にわたる国際化」「研究科としての全体的力量アップ」「学生の学びやすい環境の整備」の3つを推進していきたいと考えています。

ス通信 Report

教員としての資質を見つめた離島での教育実習

大学院修士課程社会系コース2年

中井健博（なかい たけひろ）さん

神奈川県出身。平成8年に立命館大学卒業後、地理歴史・公民科教諭として鹿児島県立伊集院高校、同大口高校で教鞭を取り、13年に三重県立亀山高校に赴任。17年4月、大学院に入学し、10月に「兵庫教育大学トカラ研究会」を立ち上げる。鹿児島県から三重県に移る際、教採試験を受け直した経験から、教員の再研修・免許更新制の有用性を認めている。

中井健博さんが主宰する「兵庫教育大学トカラ研究会」は昨年9月9日から20日までの12日間、鹿児島県のトカラ列島で、現地校の教員や島民の協力も仰ぎ、念願だった教育実習を行いました。

研究会は、鹿児島県で教員経験があり、離島の多い同県の教育事情を知る中井さんが、若いストレート院生に呼びかけて一昨年に発足しました。週一回の勉強会を開き、一年がかりで準備を進めたこの教育実習は、本学の課外研究プロジェクトにも採用されました。

実習は9人のメンバーが7つの有人島に分かれて、それぞれの島の学校で行いました。中井さんは「30分歩けば一周できる」という列島最小の小宝島に滞在。日本最後（平成2年まで）のはしけ作業が行われた5つの港の跡をフィールドワークするという社会科のオリジナル授業を実施しました。

小宝島の中学生を連れての社会科のフィールドワーク。はしけが接岸していた形跡を調べたこの授業は地元紙に取り上げられました。

「異校種を体験する意義もありました」と振り返るように、高校教員の中井さんにとって小中学生に授業するのは初めてのこと。出発の数カ月前から、附属小学校と中学校を何度か参観し、出身地である神奈川県の小学校で一日実習したことも役に立ったようです。

帰りの船は台風の接近によって欠航。滞在が4日延びた分、敬老会などの地域行事などにも参加し、さらなる経験を積みました。帰りの船は最南の宝島から北上して一島ずつメンバーを拾っていきましたが、船に乗り込んでくるどの顔も良い表情を浮かべていたそうで「みんなの実習の充実ぶりを感じました」と振り返ります。

実習に先立ち、メンバー全員で鹿児島市にある十島村役場を訪問（中央が敷根忠昭村長）。

定期船が着いた時は分校の教員とともに作業を手伝いました。

ある程度の規模の学校では教員同士で校務を分担できますが、僻地の小さな学校ではそれがなかなか難しい現実があります。

「トカラ列島での実習は、本当の意味で教員の資質を見つめる貴重な機会でした。子どもや地域社会に進んで入っていく泥臭さがあるか、責任を持って多種類の校務をこなせるかなど、まさに教員の原点に触れた思いでした」

トカラ研究会メンバーの実習校（北から・敬称略）

口之島小中学校……大瀬良知子、久野誓子
中之島小中学校……物應忠
平島小中学校……石須雄志、藤井健太
平島小中学校諏訪之瀬島分校……手嶋浩之
悪石島小中学校……森本孝伸
宝島小中学校小宝島分校……中井健博
宝島小中学校……大友秀一

※すべて小中の併設校。児童生徒数は7〜17人

トカラ列島とは

鹿児島県の屋久島から奄美大島の間、北緯29度上に点在する島々。行政区は鹿児島県十島村。7つの有人島（口之島、中之島、平島、諏訪之瀬島、悪石島、小宝島、宝島）と5つの無人島から成り、総人口は675人（18年7月末現在）。唯一の交通手段は週2便の村営定期船で、鹿児島市から最北の口之島まで6時間、最南の宝島までは13時間を要します。

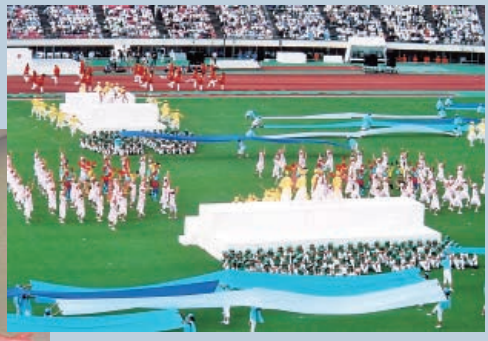
クラブ奮戦記

ダンス部

大きく成長させてくれた国体開会式式典前演技への出演

部長　学校教育学部総合学習系コース3年
武田和（たけだ のどか）さん

グリーンとホワイトの水玉模様の衣装で開会式式典前演技に出演しました。


「Meet」をキーワードにした開会式式典前演技。

私たちは月曜、火曜、木曜の週3回、体育棟2階のダンスレッスン室で練習しています。「ダンスなんて私にはできない」とよく耳にしますが、大半の部員は大学に入ってから始めました。

ダンス部では、さまざまなジャンルのダンスを踊っており、そのほとんどは部員が考えたものです。主な活動としては、4月に関西学生舞踊連盟発表会、8月には全日本高校・大学ダンスフェスティバルの舞台に立ちます。学内では11月の嬉望祭に出演し、12月に卒業公演を行っています。

昨秋ののじぎく兵庫国体では、開会式式典前演技に出演させていただきました。3月から練習を始め、多くのダンス教室の方々との交流によって刺激を受け、よりダンスが好きになりました。また、部員同士の仲も深まりました。国体という大きな舞台は、私たちに大きな成長をもたらしてくれました。出演の機会を与えてくださった顧問の畑野裕子先生、お世話になった国体スタッフの方々にはとても感謝しています。

今後は、私たちのダンスを見ていただく機会をもっとつくっていきたいと考えています。

キャンパス Campus

Congratulations おめでとう

優勝の背景に団体練習ありさらに上へ挑戦し続けます

全国教育系大学弓道選手権大会
男子個人優勝
学校教育学部学校教育系コース2年
八木寛人（やぎ ひろと）さん

昨年8月、全国教育系大学弓道選手権大会の男子個人で優勝しました。優勝が決まった瞬間は、それが本当なのか信じられず、しばらくぼうぜんとしていましたが、部員たちや他校の仲間からも祝福されて、その喜びをかみしめました。

しかし、個人より団体で勝った方がもっとうれしかったと思います。弓道は個人競技だと思われがちですが、基本は団体戦です。日々の活動では、部員同士で指導し合うことで、各自が実力向上の糸口をつかんでいきます。優勝できたのも、団体での練習を通して部の仲間に支えられ、自らも弓道部の一員として臨んだからこそ勝ち取れたのだと思います。そういう意味で部の仲間にはとても感謝しています。ただ、優勝できたことは大変うれしく思いますが、自分は未熟であり、今の結果だけで満足していません。まだ限界には達していませんし、2年生の自分には大学生活の時間が残っています。現状に満足せずさらに上の段階、上の結果をめざし、団体、個人ともに精進していきたいと思います。

正しい射型を心がけ"正射必中"をめざします。

【スポーツ大会、コンクールなどの優秀成績者】～平成18年夏–秋開催分

※学年等は受賞当時のものです

第8回
日本演奏家コンクール
（日本演奏家協会主催）
▶ピアノ部門・大学の部　入選
井上朋子さん
（大学院修士課程
芸術系コース<音楽>2年）

第17回
堺ピアノコンクール
（堺市ピアノ連盟主催）
▶奨励賞
井上朋子さん
（大学院修士課程
芸術系コース<音楽>2年）

第6回
SPSS Open House研究奨励賞
（エス・ピー・エス・エス㈱主催）
▶INTAGE賞
松浦直己さん
（大学院博士課程2年）

第1回
加東市中学校親善軟式野球大会
（加東市ほか主催）
▶ベスト4
附属中学校野球部

長尾幸子（ながお さちこ）さん

小野市立大部小学校教諭

加古川市出身。平成12年、学校教育学部学校教育専修を卒業し、宝塚市立逆瀬台小学校に着任。16年から小野市立大部小学校に勤務し、今年度は5年生を担任している。17年から2年連続で国体の弓道競技成年女子の部に出場。17年の岡山国体では遠的（団体）で8位に入賞した。

昨年は地元開催の「のじぎく兵庫国体」に出場しました。

多くの人に支えられてつかんだ国体切符

運動が大の苦手な私でも「大学生活で何かに燃えたい！」と思い、弓道部に入ったのが、今から11年前のこと。卒業後は、弓を置き、子どものころからの夢だった教師の仕事に夢中になる日々でしたが、職場の先輩に「学校だけではなく外へ出て視野を広げることも勉強になる」と教わり、弓道を再開しました。学生時代とは違い、仕事との両立にくじけそうにもなりましたが、弓道の仲間や職場の人たちの励ましもあり、4年前からは兵庫県強化指定選手として国体をめざすようになりました。

国体初出場が決まった時の喜びと感動、また共に頑張ってきた仲間やご指導いただいた先生方への感謝の気持ちは今でも忘れられません。国体出場を通して、自分自身とことん向き合うことの難しさ、大切さを学びました。また、陰で支えてくださった人たちの温かさに、出会いや人と人のつながりの素晴らしさを教えられました。

教師として、子どもたちと向き合う毎日。自分の学びを伝えることの幸せ、また、子どもたちの姿から学び、それを弓道に生かせる楽しみをかみしめる今日このごろです。

川村庸子（かわむら ようこ）さん

西和賀町立湯田中学校校長

岩手県出身。昭和60年、大学院修士課程教育方法コースを修了。岩手県内の中学校理科教諭、岩手県立総合教育センターの研修主事、小学校校長などを経て、平成18年に西和賀町立湯田中学校校長に就く。昨年9月、小学校の朝会で実践した〝サイエンスショー〟の講話をまとめた『不思議の国の全校朝会』を出版。

研究心をはぐくむ〝サイエンスショー〟

教員8年目で修士課程教育方法コースに入学し、デューイの探究について学びました。理科の授業が探究として成立するには、観察から予想する第1次仮説、その仮説を法則や原理などと論理的に照らし合わせた第2次仮説、さらにそれを確かめる実験方法としての第3次仮説の3つの仮説が必要です。それらを未消化のまま論文を提出し、修了したような思いがありました。教壇に戻った時も、総合教育センターで研修主事をしていた時も、3つの仮説が頭から離れることはありませんでした。バーチャルではなく生きている現実から授業を出発させよう、思いついたことを定義や法則などと練り合わせる場面を設定しよう、みんなで考えたことを実現させる実験方法を出し合おうなど、部分部分ではあっても自分なりに実践し論文を書き続けてきました。

3年前、岩手県北部、〝北リアスのまち〟と呼ばれる久慈市の久慈湊小学校に初めて校長として赴任しました。全校朝会では〝サイエンスショー〟を実演しながら、子どもたちの今と向き合う講話を続けました。「なぜ？」「どうして？」という疑問を感じる心がみるみる元気になり、理科の研究が好きな子どもが増えました。「楽しいだけではだめなんだ」という大学院時代の恩師の厳しい声が飛んできそうですが、今でも未消化ゆえに探究する姿勢はしっかりと持ち続けています。

朝会で液体窒素の実験を披露したことも。

昨年9月に発刊した初の著書『不思議の国の全校朝会』。

Letters From OB&OG

大学の知的資源で地域の活性化を加東市、加西市と連携協力協定を結ぶ

調印式で握手を交わす
梶田学長（左）と山本加東市長。

兵庫教育大学は近隣自治体との連携の強化を図るため、昨年10月に加東市、加西市と包括的な連携協力に関する協定を結びました。この協定により、兵庫教育大学は豊富な知的資源を地域に還元し、さらなる地域振興への貢献を、自治体は大学の知的資源を教育や文化、福祉、まちづくりなどに活用し、地域の活性化をめざします。

10月4日に行われた加東市との調印式では、梶田叡一学長が「地元の理解と支援の基礎となる協定で、新生加東市全体の盛り上がりの一歩となるよう協力関係を築いていきたい」、山本廣一市長が「3町合併から6カ月が経過し、市のスローガン『夢がきらめく元気なまち加東』の実現に向け、密接な連携によって成果を挙げたい」とあいさつ。連携協力の在り方について語り合いました。

今後は、定期的に連携協議会を開き、意見を交換しながら、より良い協力関係を築いていきます。

教育現場と大学が情報を交換し教育実践研究の拠点をめざす「Hyokyo-net」

兵庫教育大学では修了生・卒業生と在学生・大学教職員を中心に、教育現場と大学をつなぐ「Hyokyo-net（兵庫教育大学教育実践ネットワーク）」を運営しています。

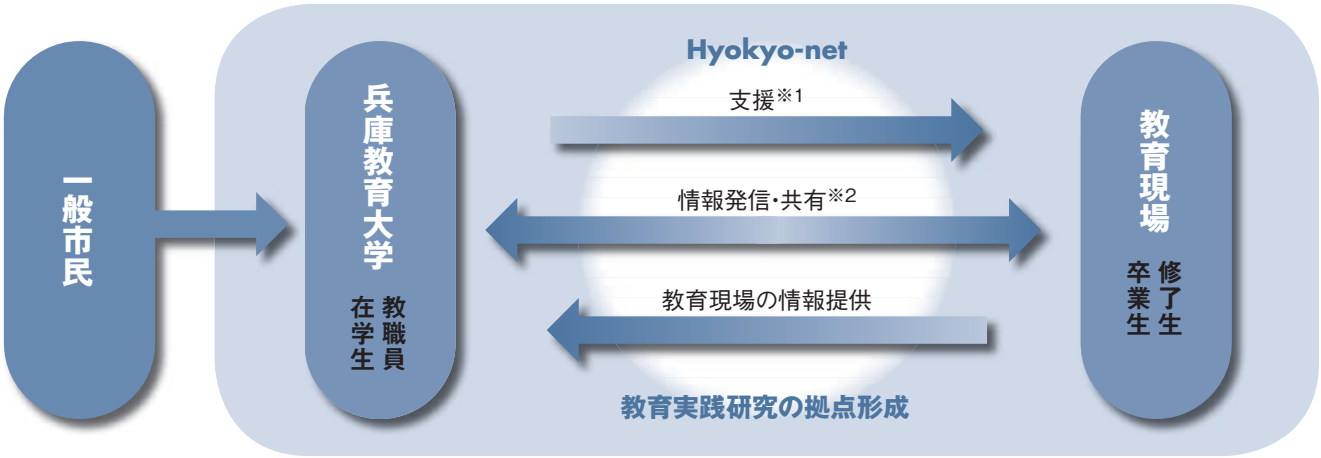
大学の研究会や共同研究などの情報をウェブサイトで提供する「情報ネットワーク」と、修了生・卒業生と大学教員の交流による「人的ネットワーク」が活動の2本柱。修了生・卒業生と大学の双方が教育現場の諸課題、実践活動の記録、研究成果などを発信、共有することで、教育実践研究の拠点づくりをめざしています。例えば、教育現場で活躍する修了生・卒業生がいじめや不登校の問題を提起し、それに対して大学教員が助言します。

今年1月、修了生向けにウェブサイトの「同窓会情報」コーナーを充実させました。近々、教育現場で抱える悩みを相談できる「課題解決」コーナーも設ける予定です。

一般の人も大学のシンポジウムや研究会の情報、投稿された意見、メールニュースなどを閲覧できます。

● Hyokyo-netの概念図

※1 教育現場の課題解決を通した実践活動の支援
※2 教育実践活動に関する情報の発信・共有



1月からアドレスが変わりました → http://www.hyokyo.net/

問 教育実践ネットワーク運営室 TEL 0795・44・2421 FAX 0795・44・2009
office-hyokyonet@hyogo-u.ac.jp

兵庫教育大学からのお知らせ

◎平成19年度第2次学生募集

☆学校教育研究科（修士課程）

◎学生募集人員

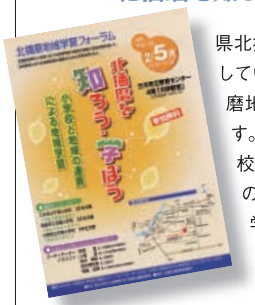
▶学校教育学専攻		
学校心理学コース	昼間クラス	若干人
	夜間クラス	若干人
▶教科・領域教育学専攻		
言語系コース	昼間クラス	若干人
	夜間クラス	若干人
社会系コース	昼間クラス	若干人
	夜間クラス	若干人
自然系コース	昼間クラス	若干人
	夜間クラス	若干人
芸術系コース	昼間クラス	若干人
	夜間クラス	若干人
生活・健康・総合内容系コース	昼間クラス	若干人
	夜間クラス	若干人
▶学校指導職専攻		若干人
▶教育実践高度化専攻		
授業実践リーダーコース	昼間クラス	10人
	夜間クラス	若干人
心の教育実践コース	昼間クラス	若干人
	夜間クラス	若干人
小学校教員養成特別コース		若干人

◎出願期間　2月13日㈫～16日㈮（消印有効）
◎試験日　3月11日㈰（筆記、口述試験とも）
◎合格者の発表　3月20日㈫16:00
※昼間クラスと夜間クラスのあるコースは昼夜開講制です。昼間クラスは兵庫教育大学で、夜間クラスは主に大学院神戸サテライトで開講します。
※言語系コースには国語分野と英語分野、自然系コースには数学分野と理科分野、芸術系コースには音楽分野と美術分野があります。
㊐入試課TEL0795・44・2067

◎第3回Bookギャラリー

テーマ「恋愛リテラシーを磨く」。誰でも知っているのに読んだことがない、読んだことがないけど本当は面白い、そんな近代の恋愛小説を中心とした哲学、歴史、科学の文献を展示します。入館無料。
◎開催期間　2月1日㈭～27日㈫
◎場所　附属図書館
㊐附属図書館TEL0795・44・2061
FAX0795・44・2059
office-gakujutu-t@hyogo-u.ac.jp
http://www.lib.hyogo-u.ac.jp/data/bookgallery.html

◎北播磨地域学習フォーラム ～北播磨を知ろう・学ぼう～



県北播磨県民局と共同して推進している地域貢献事業「北播磨地域学育成事業」の一環です。今年は北播磨地域の小学校で取り組んでいる環境学習の発表と意見交換を通して、学校教育における地域学習の発展のための方策を探ります。入場無料。
◎開催日　2月5日㈪
◎時間　13:00～16:00
◎場所　三木市立教育センター
㊐兵庫教育大学地域交流推進センターTEL0795・44・2053、県北播磨県民局企画調整部TEL0795・42・9308

◎不登校児童生徒支援に関するネットワーク会議リレー講座（第2回）

学校復帰のさまざまな取り組み －模索する適応指導－

適応指導教室は現在、保護者のニーズや在籍する児童生徒の多様化に伴い、多くの課題を抱えています。松木健一福井大学教授の提案を基に、参加者全員で適応指導教室の基本的な問題を考え合い、適応指導の新たな展望を探求します。参加無料（要申込）。
◎開催日　2月5日㈪
◎時間　15:00～17:00
◎場所　兵庫教育大学共通講義棟
㊐㊒山国地区NANAっくす活動室
TEL FAX0795・40・2245

◎学部卒業演奏会

音楽コースの学生がそれぞれ専門の楽器で4年間の研究成果を披露します。入場無料。
◎開催日　2月24日㈯
◎時間　15:30～
◎場所　兵庫教育大学講堂
㊐芸術棟事務室TEL0795・44・2249
FAX0795・44・2259

◎兵庫教育大学美術展

学部生、院生、附属幼稚園・小学校・中学校の児童生徒による合同作品展。入館無料。最終日にはギャラリートークも。
◎開催期間　3月7日㈬～11日㈰
◎時間　10:00～18:00（最終日は15:00まで）
◎場所　県立美術館原田の森ギャラリー（神戸市灘区）
㊐芸術棟事務室TEL0795・44・2249
FAX0795・44・2259

◎NANAっくす 全学プレゼンテーション

NANAっくすに参加し、不登校支援施設などでボランティアに取り組んでいる学生がその活動を発表します。特に学生の皆さんにとっては不登校支援に関する知識を深める貴重な機会です。
◎開催日　3月22日㈭
◎時間　13:00～14:30
◎場所　兵庫教育大学
◎対象　NANAっくす参加団体、全学生
◎内容　参加学生による体験報告、参加団体・学生への質問や意見交換、不登校支援活動認定証の授与
㊐嬉野台地区NANAっくす活動室
TEL FAX0795・44・2305

㊐＝問い合わせ先　㊒＝申し込み先

編集後記

●昨年12月3日に「教員養成GP成果報告会」が開かれました（本誌7ページ参照）。教職大学院の具体的なビジョンが実践的に示されたといえるでしょう。『教育子午線』は、教職大学院の構想段階から特集を組むなど、新しい試みをいち早く伝える広報誌の意義を実感しております。今後も教職大学院をはじめとする最新の情報をお伝えしていきたいと思います。（は）

●先日、学部学生の保護者の方々に本誌に関するご意見をうかがう機会がありました。わが子の学生生活を知る窓口として毎号楽しみにしていただいていることを知り、大変励みになりました。『教育子午線』は皆さんのご意見をいただきながら、これからもどんどん進化していきます。バックナンバーは本学ウェブサイト（http://www.hyogo-u.ac.jp）でご覧いただけます。（に）

◎ご意見・ご感想を寄せられた方に オリジナルステッカーをプレゼント！

『教育子午線』では、読者のみなさまの声を生かした誌面づくりをめざしています。はがきかメールで、住所、氏名、年齢、①『教育子午線』第13号の感想、②取り上げてほしい特集内容を記入してお送りください。ご意見・ご感想を寄せられた方にはオリジナルステッカーを進呈します。

●あて先：〒673-1494 兵庫県加東市下久米942-1
兵庫教育大学企画課広報・社会連携事務室
TEL0795・44・2334 FAX0795・44・2009 E-mail:office-renkei-r@hyogo-u.ac.jp

教育子午線 Kyoiku-Shigosen
第13号　2007年2月発行
発行／兵庫教育大学 大学広報室
http://www.hyogo-u.ac.jp
編集協力／㈱神戸新聞マーケティングセンター

この印刷物は再生紙を使用しています。